

エッコ

さん

昼田弥子

作

光用千春

絵

アリス館

目次

1 迷子 5

2 雨やどり 35

3 お守り 65

4 きいろいやま 101

5 エッコさん 137

6 記憶 167

1

迷子



ここどこだ？

昼寝から目を覚ましたのと同じに樹は思った。白い天井、真新しいカーテン、ひよろりと伸びた観葉植物……。そっか、自分の家だ。気がついて、ソファからむくりとおきあがる。

お父さんの仕事の都合で、春休みに引っ越ししてきてから、そろそろ一月。新しい家にもなれたつもりでいたのに、きゆうに、どこだかわからなくなるなんて、へんなかんじだ。

そういえば、今、何時だろう。樹はぼんやりしたまま、リビングの壁時計に目をやった。そのとたん、あっ！ とさけぶ。

一時五十五分。

まずい、まずい、二時から吉田とタカちゃんと遊ぶ約束してるんだった。樹はあわてて自分の部屋からリュックをとってくるなり、家をとびだした。

吉田とタカちゃんとはおなじ六年一組で、家もけっこう近い。今日集まる場所は吉田の家。まだ、いったことはないけれど、おとといの放課後、三人で近所のおおぞら公園で遊んだとき、「あれ、おれんち」と吉田が教えてくれた。「すぐそこの、水色の屋根の家」ってジャングルジムの上から指差して。それから三人で約束した。あさって日曜の午後二時に、吉田の家でゲームの対戦しようって。

「ああー、もう先にはじめてるかも」

樹は全力で走った。歯医者角をまがり、コンビニのそばの横断歩道をわたり、おおぞら公園の前をとおりすぎる。

前の学校で、樹はゲームの腕前だけは一目置かれていた。だから吉田とタカちゃんにもすごいところを見せてたくて、夕べ、ベッドにゲーム機をもちこ

んで特訓したのだけれど、そのせいで今日は寝不足。昼ご飯のあと、ついうとうとしてしまったってこのありさまだ。

いそげ、いそげ。樹は、水色の屋根の家を目指して走りつづけた。

しかし、いくら走っても水色の屋根は見えてこない。ひよつとして、とおりすぎてしまったのかとふり返っても、道の両脇にならぶ家の中に、水色の屋根は見あたらない。もしかしたら道をまちがえたのかも。樹はあおぞら公園までひき返そうとした。

ところが、いくらひき返しても公園にたどりつかない。立ちどまってあたりを見まわしても、目につくのは知らない建物ばかり。

「ここ、どこだよお」

樹はなさけない声でつぶやいた。かんぜんに迷ってしまった。

そのとき、チリリと鈴のような音がして、白い髪をした小柄なおばあさん

が、樹をすたすたと追いぬいていった。

「すみません！」

わらにもすがる思いで声をかけると、おばあさんはふり返ってニコリと笑った。

「はい、なにかしら？」

「あの、このへんに水色の屋根の家って……」

「そういいかけて樹

はハッとしました。この

おばあさん、どこかで

会ったことがあるよう

な……。

「そうだ、コンビニだ。」



先週、樹は近所のコンビニに切手を買いにいった。前の学校の友達のカッキーから、借りっぱなしになっていたコロコロコミックを、送り返そうと思ったからだ。

樹がレジで切手を買って、その場で封筒にはりつけようとしていると、どら焼きをもったお客がやってきた。それが、このおばあさんだった。

「四点で、八六四円です」

大学生くらいの女の店員さんがいった。

「はいはい、八六四円ね」

おばあさんは、ごそごそとバッグから財布をとりだす。

「八六四円っていうことは、五百円玉が一枚と、百円玉が三枚と……十円玉が……あら、えーつと……十円玉が……」

おばあさんは、財布をのぞいたままかたまった。

「あのお、だいじょうぶですか？」

店員さんが、少し心配そうに声をかけた。

すると、おばあさんはゆっくりと顔をあげて、それから、きゆうにニコリと笑っていった。

「で、おいくらかしら？」

店員さんは、おどろいたように目をぱちくりさせた。

そのとき、店のおくから店長っぽいおじさんがでてきた。おじさんは、おばあさんのほうをひと目見るなり、

「やっ、エツコ先生」

と、かけよってくる。

「そのお札、一枚あれば足りますよ」

と、財布をそつとのぞきながらいった。

「あらあ、そうなの？」

おばあさんは、きよとんとした顔でそういうと、千円札を一枚とりだした。そして、なにごともなかったように、おつりとどら焼きをうけとって帰っていった。

「なんか、へんなおばあさんだった」

その日の晩ご飯のとき、樹はお父さんとお母さんにコンビニで見たことを話した。

「なんで、あんな人が『エツコ先生』なんてよばれてるんだろ。ぜんぜん先生ってかんじじゃないのになー」

すると、アジフライにレモンをしぼっていたお母さんが手をとめた。

「そのおばあさん、エツコ先生ってよばれてたのね」

樹はうなずいた。

「なんだ、知ってるのか？」

キャベツの千切りにはしを伸ばしながら、お父さんがたずねる。

「ええ、中村さんってお宅のおばあさん。認知症なんだって。このあたりの人たちは、だいたい知ってるみたい」

「ニンチショウ？ なにそれ？」

樹がたずねると、お母さんは、そうねえ……、と首をかたむけた。

「脳がうまく働かなくなっただけ、それで、考えたり記憶したりするのがむずかしくなっちゃって生活に支障がでてくるの。この前、テレビのニュースで特集してたわ、たしか」

「へえ、でも、なんで先生ってよばれてるの？」

またたずねると、お母さんは、そこまでは知らないわ、とアジフライをか

じる。

「おお、そういえば」

ふと、なにか思いだしたように、お父さんが口をひらいた。

「お父さんが子どものころも、近所に、そんなかんじのおじいさんがいたんだけどな、やっぱり、いろいろ、わからなくなってたみたいだった。……あ、だけど、昔のことはすっかり覚えてて、とつくに退職たいしよくしてるのに、毎日ネクタイをしめて仕事にしようとしてたんだ。なんか、あれだな、頭の中が働いてたところにワープしてたのかもなあ……」

「ふーん」

樹はつぶやきながら、ごはんをおかわりしようとして立ちあがった。

「ところで、樹」

お母さんが、きゆうにこわい顔をした。

「もう、へんなおばあさん、なんていったらダメだからね。つぎにエツコ先生に会ったときは、ちゃんと助けてあげなさいよ」

どうしよう……。

樹は、目の前にいるエツコ先生を見つめた。

お母さんには助けるようにいわれたけれど、今、助けてもらいたいのは樹のほうだ。一刻も早く吉田よしだの家にかくちやならないのだ。だけど、認知症にんちしょうのエツコ先生に道をたずねてもいいんだろうか。

「えっと……その……」

樹が口ごもっていると、

「水色の屋根が、どうしたの？」

エツコ先生が、樹の顔をじつとのぞきこむ。

樹は思わず目をそらした。

「水色の屋根の家、さがしてたんですけど……あの、やっぱりいいで……」

す、といいかけたそのとき、エツコ先生がとつぜんパチンと両手をたたいた。

「ああ！ あの水色の屋根のお宅ね！」

エツコ先生はうれしそうに声をあげた。

「それなら、もちろん知ってますよ。わたしも、ちょうどそっこのほうにいくところなの。案内するわ。ほらほら、ついてきて」

そういうなり、樹にくると背をむけて、すたすたと歩きだす。

そのいきおいに、樹はあつけにとられてしまった。ほんとうに吉田の家を知っているんだろうか……。

しかし、エツコ先生の足どりには迷いが無い。もしかしたら、お金はうまくはらえなくても、道はちゃんと覚えているのかもしれない。うん、そうだ。きつと、そうにちがいない。

樹は、エツコ先生のあとを追いかけた。

保育園の前をとおりすぎ、床屋の角をまがる。エツコ先生は、あいかかわらず自信にみちた足どりで歩いていく。

チリリ、チリリ。

エツコ先生のバッグにぶらさがった鈴つきのお守りが、軽快になっっている。このちょうしなら、すぐに吉田の家につきそうだ。

あつ、そういえば、ちゃんとゲーム機をもってきてたっけ？ 樹はふと気になって、リュックの中をのぞいてみた。

